

## 基調講演

# スポーツの文化的価値とその可能性

松浪 健四郎 (日本体育大学理事長)

松浪 皆さん、こんにちは。

―― こんにちは。

松浪 昭和54年から平成6年まで16年間にわたり、専修大学の教壇に立たせていただいた松浪健四郎です。私は、本日講師として招かれたことを大変嬉しく思い、洋服ダンスから専修大学の古いネクタイを探して締めてきました。私は、今も「宮城の北」を歌うことができますし、自分の学んだ大学には4年間なのに対し専修大学には16年間も居たわけですから、専修大学に対する愛着は強くあります。

新聞を毎日見ますが、サッカーが強くなりました。明治との決勝戦は、私もひそかに応援に行きましたが、強くなりました。ですが、野球は下手をすると3部に落ちるのではないかと心配していますし、かつて、今の季節になれば胸を張れたラグビーが活字になることはありません。僅かにバスケットボールが男女とも活躍してくれている程度です。私は専修大学のことは一部始終知っているので、ファンとして、もっともっと頑張ってもらいたいと思います。

今日は、「カレッジスポーツを考える」です。もし、皆さんが卒業して、母校の名前を見るとしたら、誰かが悪いことをして社会面をにぎわわせるか、それ以外はスポーツ面しかありません。母校が活躍していることは大きな励みになり、大きな力を与えてもらえると思っています。

多くの人々は、大学スポーツは大学の宣伝のためだと言います。もちろんそれはありますが、活力のある大学である証しです。全国に4年制の大学が783校あります。その中で、専修大学の知名度はどの程度あるでしょうか。昔は相当ありました。まさか東洋や駒沢に抜かれるとは思っていませんでした。いわゆる「日東駒専」という表現をする人が居ま

すが、その一番下に「専」が来ることは、関係者として屈辱です。恐らく、スポーツの強さ・弱さも影響しています。

そして、それらのことは受験者数に反映します。専修の先生は頭が固く、運動選手を合格させる、入学させることに非常にうるさい大学でした。私が学長なら、無条件でみんな入れたのと思うこともありました。

早稲田のほうがはるかに運動選手を合格させ、入学させます。それは、大学として戦略を持っているかどうかにかかっていると思います。私の経験から言えば、大体、専修大学は戦略という言葉あまり知りません。

どのようにかして大学の知名度を上げることにより受験生が殺到します。受験生が、向ヶ丘遊園から途切れることなく続いた時代がありました。専修大学に入るのは至難の業であるという時代に、私も教壇に立っていました。胸を張って、立派な学生が本学で学んでくれました。私は、専修は、歴史もあるが故に、そういう大学でなければならぬと思っています。

とにかく、スポーツを強くすれば、卒業生は胸を張ることができます。世の中の人たちに、専修大学の認知度が高まります。そして、受験生が増えます。つまり一石三鳥ですから、スポーツの強い大学にしてもらいたいです。

とりわけ野球をなんとかしてもらいたいです。野球の応援に行くと、校歌と応援歌を自然に覚えます。決勝戦になると授業を休講にして、神宮を学生で埋め尽くしたことが幾度もありました。大変懐かしく思います。この前、1部、2部の入れ替え戦に勝って上がってほっとしたら、1シーズンで下に落ちてがっかりしていますが、とにかく強くしてもらいたいという思いを、関係者の1人として強く持っています。

今日、私は、「スポーツの文化的価値とその可能性」というテーマをいただいて話をします。今年の6月14日に、教育振興基本計

画、これからの日本の教育をどういう方向に持っていくかという計画が閣議決定されました。その4番目に、「国民の絆を強める」というのがあります。国民の絆を強めるにはどうしたらいいでしょうか。それを一番教えてくれたのは、女子サッカーのワールドカップでなでしこジャパンが優勝したことです。

あの3・11の大被害にみまわれて、国民は元気を失い、萎縮していたにもかかわらず、女子サッカーがワールドカップで堂々と優勝してくれました。国民が心一つにして応援をしました。つまり、運動・スポーツが強いと、国民の絆を強めることができます。それは、先頃決まった2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催にもつながると思います。国民がバラバラであってはいけません。日本人としての誇りを持ち、自分たちの国に自信を持つためには、国民の絆を強化する必要があります。この教育振興基本計画の中で、スポーツの強化がうたわれています。

そして、これを受けて、文部科学省は、来年の文部科学省の予算を策定しようとしています。その中に、sports for tomorrowという選手強化策が挙げられています。よく読んでみると、強化策の1番には、「各大学で選手の強化をしてほしい。そのために少し補助金を出そう」と書かれています。それは、国民が心一つにするのはスポーツの応援だということ、なでしこジャパンが教えてくれたからだと思っています。

そういう意味において、専修大学も選手を強化しなければいけません。強くするにはどうすればいいでしょうか。いろいろな策はあると思いますが、とにかく、魅力的な学校にし、キラッと光る輝きを持たなければ、一流選手は専修大学に押し掛けてきません。結局、総合力が物を言うと思います。

多くの先生方は、勉強ができるものが素晴らしい、音楽、絵画、スポーツが素晴らしい、入試科目にないから駄目だと評価します。私

は若いときに、アメリカの東ミシガン大学に留学していました。英語は全く話せませんでした。けれども、州立であるこの大学が私を受け入れてくれました。レスラーとしての力を認めてくれたわけです。つまり、アメリカでは、学力のある者だけを評価するのではなく、一つ一つ、いろいろな特徴と特技があることを評価します。つまり、万能を平等に評価します。

大学は学問の府であると同時に人格形成の場であり、人間を作る場所です。としたならば、人間を作るためには、人間力の素晴らしい人材を育成するため多様性に富んだ大学でなければなりません。

私が専修大学に居るときは、体育実技は必修でした。実技で、みんな仲よくチームを組んで授業をやりました。そうすることで、新しい友達ができたり、友達の一つの特技を発見したり、絆が強まっていったと思います。けれども、今、文部科学省の大学設置委員会では、体育の授業は選択制に変わっていききました。

今の社会のキーワードは健康です。健康を維持するためには運動をしなければいけません。それには生涯スポーツだという視点からすれば、学生時代から熱心にスポーツに親しむ必要があると思いますが、なぜか、体育の授業・実技が軽視され、今日に至っています。そのことを私は悲しく思います。

スポーツは単なる勝ち負けの文化ではありません。大変重要な側面を持っています。いわゆる、きょうのテーマである「文化的価値を持つ」という認識を新たにしてもらわなければいけないと思います。

一昨年、スポーツ基本法という法律が制定されました。この法律の前文1行目にこのように書かれています。「スポーツは、世界人類共通の文化である」。ここから、この法律が始まります。そして、一言で言えば、全ての国民がスポーツをする権利を持ちます。そして、国および地方公共団体は、国民がスポーツをできるよう、楽しめるよう施策を講じなければなりません。

運動をする、体を動かすことが、健康の維持・増進につながると科学的にはっきりしていますから、これをやることによって、わが国、政府の医療費を削減することができます。この国は、入院をして、病床に横たわる人たちは支援しますが、元気な人の応援はしません。

元気な人が病床に伏すことのないように、あらかじめ手を打っておかなければいけませ



松浪健四郎氏

ん。これがスポーツの振興だと思えますし、それをやる必要があります。それをやらなければ、わが国は先進国とは言えないし、立法国の仲間入りを果たすこともできないし、意識はまだまだ発展途上国並みだと言わねばならないと思っています。しかし、この国の人たちは、スポーツの持つ文化的価値を認めようとしません。だから、現状のままなのだと思います。

文化的価値といえ、まずは文化とはなんぞやという話になります。字は簡単で、誰でも書くことができますが、文化について説明してくれとお願いすると、説明できる人は少ないです。そこで、私流に説明すると、文化とは、まず、あってもなくても構わないし、困らないものです。しかし、われわれが生きていく上において、あったほうが心を豊かにしてくれます。そして、その価値は普遍性に富んでいます。100年経とうが200年経とうが、その価値は変わりません。これが文化です。有っても無くても構わない、有ったほうがより豊かな生活を送れ、心を豊かにすることができ、その価値は普遍性に富んでいる、これが文化だと思っています。

では、スポーツとは一体なんでしょう。スポーツは、運搬する、転換するという語源の「portare」を由来とする「deportare」から来ています。つまり、気分転換をするということです。昨日、たまたまNHKのテレビでやっ

ていましたが、われわれは、野生児に近づき、運動をしたほうがうつ病にならないし、また、うつ病になったら、自然の中で生活をする人のような生活をしたほうが快方に向かいます。

もしかして、この難しい、たくさんの方のストレスを抱える時代にあって、われわれは、ストレスを軽減する方法として、運動やスポーツで体を動かしたほうがいいのではないのでしょうか。勉強するにしろ仕事をにしろ、気分転換することによって能率を高めることができますと思えますし、そこにスポーツの一つの価値を見いだすことができると思っています。

スポーツは、一体いつ頃から始まったのでしょうか。この文明の進んだ時代にあって、ボールを扱って遊んだり、喜んだり、ただ走って喜んだり、悲しんだり、なぜそのようなことをするのでしょう。

私は、かつて、スポーツ人類学という学問を専らにしていました。われわれの祖先は狩猟、つまり、狩りをして生きてきました。2本足歩行をし、木の上での生活を終えて、サバンナで生活を始めました。そして、狩猟・採集の生活を営みました。古い遺跡から、まずたくさんの方が発見されます。人間だけが石を投げます。チンパンジーは果物や木の端切れを投げたりしますが、石を投げる動物はヒトをおいていません。それ故に、ヒトは知性人、ホモサピエンスといわれると同時に、投石人





と呼ばれます。ホモ・フンディートルといいますが、ヒトだけが石を投げます。この、石を投げることによって狩りをする事ができました。

ところが、この狩りは1人ではできませんでした。どの方向に獲物が居るか発見する力のある者、獲物をこちらに追い出してくる者、上手に石を投げて獲物を仕留める者、狩りの終わった後で上手に肉を解体する者、その皮をなめして被服を作ることのできる者、肉をうまく乾燥させて保存に耐えるようにする者、いろいろな人たちが居て、その生活が成り立っていました。

つまり、分担をし、その人の個性を認め合い、特徴・特技を認め合って、みんな仲よく生活をしてきました。これが人の歴史です。やがて石を投げるよりも、ブーメランを投げるよりも、より早く、より遠く、より正確に投げることができる槍を使うようになります。そして、槍を投げるよりも弓を射ることで、より効果的に狩りをする事ができるようになります。これは、鉄砲が発達するまで人類社会の中で続いてきたことです。

人間の肩の発達は、大体200万年前に、今日のわれわれの骨格のように、物を投げることができるようになったというハーバード大学の研究がありますが、とにかく狩りをしてきました。それ故に、われわれの遺伝子の中、血の中には、狩りをしたい、狩りをしなければならぬという思いが宿っています。

ですが、これだけの近代的な社会の中におい

て狩りをする事はできません。狩りの代理活動として、私たちはスポーツを楽しんでいると言っても過言ではありません。私は、そこにスポーツの文化的価値が潜んでいるとも思っています。だけど、モータースポーツなんて狩りと関係ないじゃないかと思うかもしれませんが、そうではありません。前に走る自動車が獲物であって、その獲物を抜き去ることによって仕留めます。そういう視点からすれば、多くのスポーツの源流は狩猟に見ることができます。

そして、美しさを競うスポーツがあります。これは、宗教的儀式から生まれたものと言っていると思います。それ故に、美を競うスポーツは、競技中に野次ったりしません。神聖な面持ちで静かに競技を見守ります。もう一つに、格闘技があります。美を競うスポーツは神との対話をするためのものであり、もう一つは、レスリングをはじめとする力比べで、神占と言って、占いのために神様の前でするものです。これらが源流でしょう。

つまり、狩りと宗教が今日のスポーツを生んだと謳っていいと思っています。それ故に、より強く文化性を持っていると言っていると思っています。

スポーツの、もう一つの文化的価値の高さは、個性を生かす点です。先ほど、狩りをするのに一人一人の個性を生かすと言いました。個性は英語でアビリティ(Ability)、才能、手腕のことです。この個性というのは、その人しか持ち得ない極めて大切なものです。ス

ポーツは、その個性を生かすためにも行われると思っています。

例えば、強くなるため、技術を習得するために練習をします。プラクティス、エクササイズ、スタディーと言っていていいかもしれませんが、繰り返し繰り返し反復することによって技術を身に付けます。ですが、一人一人、背の高さも違えば手足の長さも違うとしたら、先生やコーチから教えてもらった技術は、自分なりに工夫して自分のものにならなければなりません。つまり、個性を生かし、自分の思いと体に合った方法で技術を自分のものにする事です。これが練習です。個性を殺してはいけません。個性を生かさなければいけません。

次に、トレーニングという言葉があります。技術は身に着けたけれども、この技術をより有効的に発揮するために、パワーやスピード、持久力が必要ということになると、いろいろなトレーニングをしなければいけません。そのトレーニングも、自分のどこに弱点があるかを理解し、徹底的に強化を図ることです。つまり、一つ一つのトレーニングは、皆と同じことをしていたのではいけません。個性がなければいけません。個性を發揮しなければいけません。自分を分析する力を持たなければいけません。そうすることによって、トレーニングをより効果的なものにし、高めることができます。練習もトレーニングも、個性の發揮です。

ところが、この国には稽古という言葉があります。これは英語に訳すことができません。

なぜなら、わが国独特のものだからです。稽古とは一体なんですか。これは、様式・形式・作法を学ぶことです。つまり、個性を發揮していいところと、個性を殺さなければいけないところがあることを学ぶのです。私は、これが稽古だと思っています。

皆さんのお母さんが、若いときにお稽古事を行いました。お茶やお花、いろいろなものを習いに行きました。この国の女性がなぜ昔からお稽古事してきたかという、お嫁に行ったときに、嫁いだうちで個性を發揮するとトラブルが起こるからです。個性を殺し、様式・形式・作法に則って振る舞うことによってうまくいきます。だから、個性の殺し方を学ぶことがお稽古事であったと思います。

日本の武道も、おおむね稽古といえます。これも個性の殺し方を学ぶことです。つまり、個性は發揮してもいいけれども、個性を殺さなければいけない、發揮してはいけない場所、場面があることを学ぶのがスポーツだと思っています。そうすることによって、スポーツマンは相互の理解を深め、いい友を得るだろうし、友好関係を構築することができると思っています。

オリンピックは若人の祭典と言われるのと同時に、平和の祭典とも言われています。世界の国々は、国の体制が違い、法律が違い、何よりも風土が違い、食生活が違います。そこでできる民族性、国民性はまちまちです。何もかも違います。例えば、日本の「こちらへおいで」の手招きは、アメリカでは「あっちへ行け」です。このように、何もかも違ってきます。

しかし、スポーツだけはどこへ行っても同じルールで戦います。そして、その価値観は同じです。だからこそ、激しい戦いをした後、ノーサイドになれば友になることができます。相手を称えることができます。相手を知ることができます。そこに、スポーツの大きな価値があり、オリンピックが平和の祭典と言われる所以がそこにあると思っています。

嬉しいことに、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定されました。多くの人は、たくさんのメダルを取らなければいけない、勝たなければいけないと言いますが、その前に、われわれは国民として、外国のお客様をいかにお迎えするか、「おもてなし」の心が大事です。われわれは、少しでも外国のことを勉強しなければいけないのではないのでしょうか。

とりわけ、イスラム教の国々からやってくる人たちの考え方、習慣は、われわれではなかなか理解することができません。そういうことについても勉強しておく必要があるのではないのでしょうか。でなければ、私たちが、真心を込めておもてなしをしても、逆の効果が出る可能性もあります。

例えば、せっかく来てくれたのだからとビールやお酒を振る舞います。しかし、イスラムの国の人たちは、酒を飲むことはありません。そして、素晴らしい料理で歓待しますが、そこに豚肉が使われていないか、牛肉はハラールという方法でと殺したものかどうかということも知っておかなければ、せっかくのおもてなしがおもてなしになりません。

私たちはオリンピック・パラリンピックを開催するにあたり、世界中からお客さまを招く上において、各国の文化や習慣、いろいろなことを学んでおく必要があるし、それができて初めて平和の祭典を主催する資格があると思っています。

1964年に東京でオリンピックが開催されました。1945年に大戦争で敗戦をした日本が、あつという間に復興し、オリンピックを開催することになりました。政府は何をしたでしょう。

政府は、東京―神戸間を高速道路でつなごう、東京―大阪間に新幹線を走らせよう、首都東京の地下鉄網を整備しよう、東京都内の環状線の高速道路を整備しよう、青山通りをきちんとしよう、駒沢公園周辺を整備しよう、バラックが立ち並ぶ代々木をきれいにしよう、大改革を行いました。

ところが、わが国の政府は、これらをするほどのお金を持ちませんでした。INF世界銀行から大変な借金をしました。ありがたいことに、オリンピック以後のわが国の経済の発展、景気は右肩上がり、その借金は平成2年に全部返済し終わりました。

それだけの借金をして行ったイベントは、日本国民に自信を植え付け、世界の国々に日本の偉大さを宣伝することに役立ったと思いますが、これは、ラッキーだったと思う一面もあつたと思います。

2020年のオリンピック・パラリンピックを開催するにあたって、東京都は既に4000億円の予算を計上しています。外国から借金をする状況ではありません。このオリンピック・パラリンピックをすることは、子どもたち、ま

た大人たちに夢を与えます。

大体、オリンピック・パラリンピックは国の経済や生活様式の変化の一つの分岐点になります。それは、今までの歴史でもありました。7年後、国が変わるだろう、いえ、私たち一人一人が変わっていくだろうと思います。それが刺激であり、オリンピック・パラリンピック開催の効果ではないかと思っています。

ちなみに、紀元前776年から始まった古代オリンピックは、約300回続けました。なぜそんなに続いたのでしょうか。それは、オリンポスのゼウスの神を中心にした12神を祭る宗教的イベントであったということもありますが、都市国家が全部集まって、そこでいろいろな話し合いをしました。今日風に言えばサミットかもしれませぬ。そして、神を祭るイベントであるが故に、紛争中の国々は紛争を中止してオリンピックに参加しました。

オリンピアの山の麓に、大きなテントが幾張りも幾張りも並びました。そして、多くの人々がそこにやって来ました。4年に1回開催されるオリンピックのイベントには、世界中の特産物が並べられ、物と物を交換する、種と種を交換するというような、現在でいう国際見本市的な趣でテント村が賑わつたことを歴史が教えてくれています。

人が集うということは、われわれにいろいろなものを提供してくるということであり、史実は、オリンピックが古代ギリシャの文化的向上に大きな役割を果たしたことを教えてくれています。

そのことを思うと、2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることは、われわれの国が新たに変わる分岐点になるでしょう。私たちはそのための心構えをしておかなければならないと思います。

いずれにしても、反対をしていたメディアまでもが、オリンピックをやろう、協力しよう、みんなで世界中のお客様をお迎えしようという雰囲気になってきています。オリンピック・パラリンピックが、文字通り平和の祭典になるように、そして、オリンピック・パラリンピックの開催が世界に平和をもたらさなければならぬと思います。メダルを幾つ取るか、どうしなければいけないかという議論ではなく、オリンピック・パラリンピックの文化的価値、可能性を皆さんに理解してもらいたいです。

時間が来ましたので、私の話を終わります。ご清聴、どうもありがとうございました。